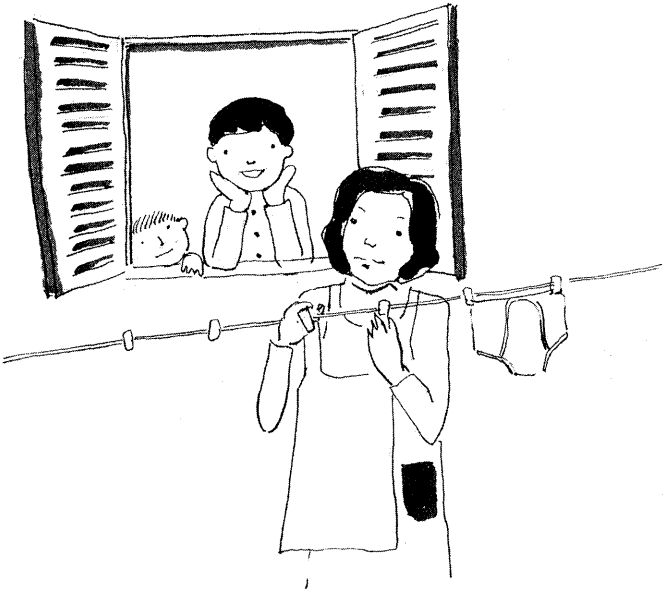

ふくろうのつぶやき

―多くではなく、深く―

真壁伍郎

小さな家庭文庫とはいっても、二〇年もたてば、本の数もしだいに多くなります。もちろん公共図書館の代わりをしようなどとは当初から思っていませんでした。本がいっぱいある、本好きなおじさん、おばさんの家で、子どもたちが本のことであれこれおしゃべりでき、それが楽しければもう結構。家庭文庫のよさは、こうした気軽さにあるとわたしたちは信じています。

ですから蔵書も、最初から、あらゆる分野の本をそろ

えようなどとは考えず、わたしたちの気にいった本、子どもたちに読ませたいと思うような本を随時買ってきました。それでも、その数がかれこれもう三千冊近いものになってしまいました。

決して良い本ばかりがそろっているわけではありません。今から考えれば、とても子どもたちによい本だなどと薦められないようなものもあります。たくさんの蔵書は、それ自体決してほめたことではありません。よい本を求めて試行錯誤してきただけのことです。迷いもなく、よい本が探し出せ、それとだけつきあっていけたらどんなにかいいことでしょう。

有名な話があります。ドイツのある有名な教授、彼は山ほどもある本でかこまれた研究室に助手や学生たちを導き入れて、こういったそうです。

「みなさん、わたしたちのこれからの演習の目的は、いかにしてこれらたくさんの本を読まずに学問をするかを明らかにすることです」

本物の学者にしていえるすばらしい言葉です。きっとこの人も、実際はとても多くを読んできたにちがいありません。それだからこそ、学生たちにこのような適切な指導ができたのだと思います。大学者ならぬわたしたちが、よい本を求めて迷うのは当然です。でも、迷いながらも、いかに読まずにすますかを究極的にはたずね求めたいものです。

毎週土曜日、文庫の本棚の前で、子どもたちは、この迷いの最初の訓練をしているようです。

「どれにしようかなぁ。これはもう読んでしまったし、こっちの本はあんまり面白そうじゃないし……」

子どもたちの迷いは、なかなか大きいです。こちらが手助けをすればよいのでしょうが、そこはちょっとの辛抱。自分で探してもらいたいのです。たくさんある本の中から「自分」で選んで、それが面白かったら、それは子どもにとって、大きな業績になるでしょう。選ぶことができるとは、将来、事によったら、自分の進むべき人生の選択にも通じるかもしれませんし、また、一人の伴侶と生涯つきあう決断にも通じかねません。

面白い本を見つけるのに苦労している子がいるかと思えば、あんまり借りていきたい本がいっぱいあって、それを並べて、どれにしようかと迷っている子もいます。見ていて、わたしは心のなかでいいます。「そうなんだ、選ぶってことは、捨ててゆくことなんだよ」

小学校や中学校の図書館で、最近どうしても本を選べない子がいるそうです。一時間中、図書館の中をうろうろしているといいます。先生かだれかが、これにしなさいといえば、それで収るのでしょうが、自分ではなかなかその決断ができない。自分の好みが分らない。なにをどう選んでよいか分らない。子どもたちも大変な状況に陥ったものです。本がありすぎるし、なにもかも親まかせ、先生まかせになっているからでしょう。

選ぶことをめぐって、あれこれ考えていたある日、ふくろうがなにやら呪文のような言葉をつぶやいていました。ノン・ムルタ・セド・ムルトゥム（non multa, sed multum）。どうも、ラテン語のようです。ノン・ムルタ、多くではなく、セド・ムルトゥム、深く、（not many, but much）。なかなか意味のある言葉です。

子どもたちにたくさんの本を読ませようと、学校では、読んだ本の冊数を競わせているところが多いと聞きます。その影響なのでしょう、文庫に来る子どもたちにも同じような現象が見られます。文庫の貸出カードには、一枚に約四〇冊の本の名前が書けるようになっていますが、これに借りる本の名を書きながら、

「ぼく、もう八枚目だよ」

などといっている子がいます。

カードのどこにも、そんな記録はしていないのに、自分が読んだ（借りた？）本の冊数をはっきり覚えています。おどろいてしまいます。きっとこの子の親も、冊数のことをいうのでしょう。学校の図書館が、今ではそうしたコンクールの場になっているのだと聞きます。恐ろしいことです。

一方、そうした子どもとは、まったく対照的な子どもがいます。一回の貸出は二冊までだというのに、いつも

一冊しか借りていきません。それも、とても大切そうに借りていきます。「楽しみ」を借りていくといった感じです。その子には、それで充分なのでしょう。その一冊をどんなふうに楽しんでいるのかな、と想像するだけでも嬉しくなってしまいます。こうした子どもの家では、たいてい親も読書好きであることが多いようです。親もあまり冊数のことはいっていないようです。冊数よりも、楽しさのほうが大切で、きっと本の内容について親子で話し合うことがあるのでしょう。お母さんたちが、時々わたしたちに、本をめぐっての家庭での親子のやりとりの様子を伝えてくれます。幸せな子どもたちだなと思います。

「文庫（の時間）も楽しいけど、帰り道もまた楽しいんだなぁ！」

いつも穏やかな表情をしている五年生のかおりさんが、ある時、つぶやくようにいっていました。

「え、どうして帰り道が楽しいの」

彼女の答えはこうです。文庫に来るときは、今日はどんなお話や本を読んでもらえるかと楽しみにして来る。そして、文庫の時は、それはそれで楽しい。でも、帰り道、友だちと今日聞いた話や、読んでもらった本のことを、あれこれ話して帰るのが、また、とっても楽しいのだそうです。

すごいなぁと思いました。この子は三重の楽しみを味わっているのです。ふと、あるけちな男の話を思いだしました。

ある、とてもけちな男がいました。彼は食べるのも、飲むのも、みんなけちけちでやっている。ですから、ごはんを食べるときも、おかずは梅ぼし一つだけ。この一つの梅ぼしを、彼はまず、にらんで一杯、そして、食べて一杯、最後に種にして一杯。このようにして、この男、梅ぼし一つで、三杯のごはんをおいしく食べていたといいます。

子どもたちのお話の楽しみようは、まったくその通りです。口につばをいっぱいためて、おいしいものを待

つ、あの「先だつ喜び」を子どもたちは知っています。残念ながら、わたしたち大人はいつの間にかこれを忘れ去ってしまいました。指おり数えて待つほどの期待を、もう持てなくなってしまったのです。

さらに、「後なる楽しみ」。これもわたしたちは子どもに学ばなければなりません。余韻や感動を胸に、家に帰り、眠りにつく。きっと感動が心に刻まれるためには、それ相当の暖めの時間が必要なのでしょう。

文庫の帰り、仲のよい友だちと、ぽつりぽつりと語り合いながら、家に帰るかおりさんの姿を想像して、わたしは心が熱くなってしまいました。

先を急ぎ、あたふたとあれこれ読みあさって、いかにも本を読みましたという顔をしているのがわたしたち大人です。とくに学者といわれている人たちが、どれほど本当に本を読んでいるのか。かおりさんの言葉に深く反省させられました。

子どもたちの楽しみようは、本来こうだったのでしょう。一つの物語は、一つ世界。いっしんにお話に耳を傾けている子どもたちを目のまえにすると、「満たされた時」というものが、どんなものかがよく分ります。

冊数に惑わされなければ、じっくり楽しめるものを、と、子どもたちの本を選ぶ姿を見ながら考えます。たくさん本を読めば、それだけ賢くなり、人生も豊かになる。親や教師のそうした思いが、あの子たちの背後にあるように思えてなりません。しかし、それをいったいだれが確かめたことがあるのでしょうか。知識を追い求めた、または追い求めている大人たちは、それが自分たちの人生を豊かにしていると実感しているのでしょうか。

目は見ることに飽きることがなく、
耳は聞くことに満足することがない。
先にあったことは、また後にもある。
先になされた事は、また後にもなされる。
日の下には、新しいものはない。
「見よ、これは新しいものだ」と
言われるものがあるか、

それはわれわれの前にあった世々に、
すでにあったものである。
（伝道の書）

旧約の詩人が語るこうした言葉が、異様なほど真実味をもって追ってきます。この詩人は、さらに「多くの書を作れば際限がない。多く学べばからだが疲れる」とさえいいます。

なにも深い考えがあったわけではありませんが、かなりの年月、わたしは、テレビと新聞のない生活をしたことがあります。どれくらい、時代遅れになるかのか試してみようと思ったのです。もちろん家族も一緒です。

その結果、時代遅れになったかどうかは分りません。でも、この期間は、わたしたちにとって、まさに「恵まれた時」だったようです。ゆっくり家族で話し合えましたし、わたしたちを訪ねてくる友人、知人との話が、新鮮でどんなに面白かったか。文庫の子どもたちも、自分たちが見聞きしたことを、このなにも知らないおじさんに、一生懸命に話してくれました。まさに、語る喜び、聞く喜びを双方で味わっていました。

そんな経験をした後で、はっと気づかされることがありました。わたしたちの会話が（そして、研究が！）いかに、すでに見たり聞いたりしたことの確認にすぎないかということです。勝敗の分っているゲームの結果をあらためて論じている。だれかれの言葉をさらに繰り返し、論じ合う。ほとんど論じるという形でしか、新しいことをいっていない。ですから、新しさは、言葉でしかない。そのために、みんな新しい言葉をなんとか考えだそうと努力している。変なことだ、と思いました。

三世紀に書かれた、こんな言葉があります。

知恵をになった言葉は
主の賜物であり、
本当の生き方を知らしめる。
天の高みによって、豊かに実らされたのでない言葉、

ただ、天や地を測ったり、
定義することをしたがるだけの言葉、
太陽や星々の
距離や大きさを知りたがるだけの言葉、
これらの言葉は　人間の発明したものだ。
むなしく働き、
無益な虚栄のために
重要でないものごとを探し求める
人間の発明したものだ。
これらの人々は
無益な労苦の中に時を失う。
ちょうど篩（ふるい）を用いて
井戸から水を汲むように。
被造物の神秘は　かれらにとって
いつも隠されていることだろう。

（大アントニウス）

あれも覚えろ、これも覚えろといわれ続けている子どもたちは、ひょっとしたら、このヨーロッパ中世の人のいわんとしていることを予感しているのかもしれません。あれこれではない、自分を元気づけてくれる言葉がほしい。そのような見通しのある世界を教えてほしいと子どもたちは願っているのでしょう。新しいのでもない、古いのでもない、子どもたちの「いま」に働きかけてくれるような言葉です。

かなり前のことですが、忘れられない思い出があります。文庫に来ていた、とおるくんは、なかなかのきかんぼうでした。学校でも手をやかれ、叱られてばかりいる様子でした。暴れては、友だちにけがをさせ、みんなから敬遠されていました。彼自身の体にも生傷の絶えたことがありません。家では、おとなしくて、勉強ができる弟と絶えず比較されていたようです。とにかく文庫に来ても、ぜんぜん落着かず、一時はどうなるものかと思いました。

このとおるくん、ある日、文庫が終っても、なかなか帰ろうとしません。みんなが帰ってしまってから、よう

やく彼も帰りかけました。なんとなく、なにかありそうです。わたしは、玄関まで見送り、「じゃ、また来週ね」といって、ドアを閉めました。あ、帰っていったな、と思う間もなく、彼はもどって来ました。そして、ドアをぱっと開いていいました。

「おじさん、ぼく、いい子？」

とっさのことで、わたしも面くらいました。

「うん、いい子だよ。どうして？」

「ううん、いいんだ」

彼はにっこり笑って、元気よく、さよなら、といって、帰っていきました。

その時ほど、わたしは文庫をやっていてよかったと思ったことはありません。彼はその日、学校でも叱られ、家でも叱られていたのでした。彼の様子でそれがよく分りました。せっぱつまったとおるくんの「ぼく、いいこ？」の声が、いまもわたしの耳にはっきり残っています。彼は、それに答えてくれるただ一つの言葉を求めていたのでした。人ごとではありません。わたしたちも、実は同じ叫びをあげながら生きているのではないか。わたしは、とおるくんのことを思いだすたびに、自分のことを考えてしまいます。

たしかに文庫は、本やお話を楽しむ場所です。でも、それ以上に、わたしたちが子どもたちと向いあう場所です。語りかけ、聞くということ自体が、もう普段の関係とはちがいます。いのちに触れる、もっと深くて、重いものが、そこにはあるように思えてなりません。何冊本を読もうが、どんなにお話を知っていようが、それはあまりたいしたことではありません。一つのお話を、一つの世界を、精一杯語り、聞こうとすれば、そこにはもう、測ることのできない何かが、語り手にも、聞き手にも起っているのだと思います。

さて、ここまでくれば、本を選ぶ秘訣は、ごく簡単です。一つでいい、その子が好きな、一つのお話、一冊の本が見つかればいいのです。それが糸口になる。

あまり本を読んだ経験がないまま、五年生くらいにな

って始めて文庫に来る子がいます。そういう子どもたちはどうかな、と見ていますと、とても面白いことに気づきました。たいてい、まず二、三年生の子どもたちがよく見ているような絵本から出発します。もちろん、わたしたちの文庫では、これは何年生むきの本だとか、あなたは何年生なのだから、これくらいの本を読みなさいなどとは決していいません。

「後もどり現象」だね、などと、わたしたちはいっていますが、たしかにその通りです。でも、その後が面白い。いつまでもそれが続くわけではありません。いつの間にか、そういう子どもたちも、だいたい自分の年令相当の題材を扱った物語に行きあたり、読みふけるようになります。面白いものです。

それよりも、子どものタイプによって、こうもちがうものかと思わされることがあります。外向的で、いかにも才気かんばつに振舞う子よりも、ひかえ目で、どう見てものろまで内気な子が、はっきり自分の好みを知っていて、さっさと気にいった本を選んでいるのです。外見に相違して、迷わないのはこの子たちです。

たしかにこれは、臨床心理の場でも確かめられていることのようです。ユング派のディークマンというドイツの学者が、はっきりそのことをいっています。子どもの頃、心に刻むお話をしっかりもっていて、それをその後の人生の糧にするのは、ほとんど内向的な子どもだというのです。外の世界に不安を抱けば抱くほど、そうした子どもは、確かな心の世界を内に育てようとする。よい文は、その適切な助け、また糧となっていると。

そのお話、知っている、知っている、を連発する物知りの子どもが多くなりました。よけい知っていれば、それで満足する世間の風潮が、子どもにはっきり表れています。子どもでもこういう子は、勉強のできるよい子で通っているのかもしれません。でも、胸に響くようなお話一つも、自分のものとして暖め、持っていることができないとしたら、その先、どう人生を豊かにしていくことができるでしょうか。

サンテグジュペリの「星の王子さま」の一節にあります。

「人間たち、どこにいるの？」と、王子さまは、（花に）ていねいにたずねました。

花はある日、隊商の通ってゆくのを見たことがありました。

「人間？　六、七人はいるでしょうね。なん年かまえに、見かけたことがありましたよ。だけど、どこであえるか、わかりませんねぇ。風に吹かれて歩きまわるのです。根がないもんだから、たいへん不自由していますよ」

急ぎ足で、あちこち探し求めて歩くわたしたちには、根がありません。根がないわたしたちが、どうしたら、枯渇せずに生きていけるのか。

「歩きまわるよりは、あなたの足もとを深く掘ってごらん」と、ふくろうはいいます。

何を探しているのか分らないままに歩きまわるよりは、深く掘るのだといいます。一つの言葉、一つの物語、いや、一つのいのちを静かに見つめてごらん。その深いところに、泉は、ちゃんとわいているではないかと。

（新潟医療短期大学）